【コラム】遊郭への小旅行―近場に「癒し」を求めて

高田公理

一七二一（享保六）年、江戸の人口五〇万のうち男子は三二万、女子は一八万。性比は女一〇〇に対して男一八二の高さであった（鬼頭宏『日本二千年の人口史』）。しかも一夫一婦の婚姻規範が、厳密に守られていない。そのため、相当部分の男が妻を持てなかった。その性的エネルギーを吸収するうえで、遊郭は、必要不可欠な存在であったといってよい。

それだけではない。吉原遊郭を例にとれば、そこは「歌舞の菩薩の色競べ」「北州千歳の寿」、あるいは「四季折々の風景は、げに仙界もかくやあらん」（蜀山人）と称された。つまり遊郭は、あらゆる快楽が提供される、日常世界から隔離された異界だったのだ。しかも、厳格な身分制度の埒外にあって、すべてを金が支配する別世界でもあった。

こうした遊郭を男たちは、いうまでもなく最終的には性的快楽を充足させるために訪れる。しかし、そこに至る過程では、さまざまな遊興が楽しまれた。絢爛豪華な空間、美しい衣装、上等な料理と酒、さまざまな芸能などである。それは、いわば「快楽のマルチメディア」にほかならない。

そんな遊郭を訪れることは、江戸の町人たちにとって、一種の「近場への旅」という様相を呈した。実際、江戸からみれば吉原遊郭は、墨田の川向こうに位置していた。品川の遊里も、日本橋に始まる東海道の最初の宿場にあった。これらの遊郭や遊里を訪れることは、単なる「性的遊興」を超える、ある種の「旅」にも似た楽しみを伴っていたのである。

実際「遊郭への小旅行」は、しばしば「心身を癒してくれる」という方便のもとに行われた。無論それは「虚実の皮膜」に漂う物言いに過ぎない。しかし、こうした方便や物言いを、面白おかしく物語る「落語」のなかには、「遊郭・遊里の真実」を言い当てている場合が確かにある。そのうちから興味深い話題を選び、「近場に『癒し』を求めた『遊郭・遊里への小旅行』」の諸相を改めて捉え直す。それが、この研究発表の主たる内容である。

もとより「落語」は、近世初期に江戸で始まり、大坂でも盛んになった大衆芸能である。したがって、そこで語られる内容を、正確な史実と考えることはできない。さらに時代の変遷の過程で、話の内容が絶えざる変化にさらされてきたことも事実である。

しかし、まるで根拠のない話が、人々の笑いや楽しみを誘うこともまた、あるはずがない。といった視点から、落語のなかのエピソードを取り出し、江戸の人々の「遊郭・遊里詣で」を、一種の「近場への旅」と捉えて、論を進めたい。

（二〇〇五年三月一一日発表概要）

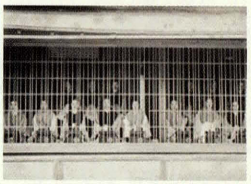
吉原遊郭＝別世界、価値の転倒

— 身分、性、そして金 —

— 江戸文芸の中の吉原遊郭 —

「歌舞の菩薩の色競べ」「北州千歳の寿」

「四季折々の風景は、げに仙界もかくやあらん」（蜀山人）

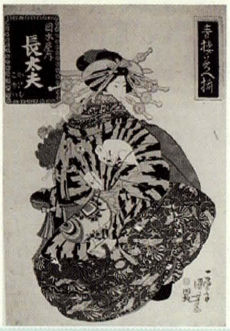


「落語」という大衆文芸に「遊郭」の「癒す力」を読む 2

←

遊郭への小旅行

—近場に「癒し」を求めて—



国際日本文化研究センター

2005.3.11

高田公理（武庫川女子大学）

「癒しの時空間」としての遊郭

—落語「居残り佐平次」と「心身の癒し」—

「どうだい、みんなでひさしぶりに押しだそうじゃないか」

【集団的な「性の遊び」（cf.欧米文化）】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それで兄貴はどうするんだい？」

「おれか・・・おれはな、この間からどうも体のぐあいが悪くってしょうがねえ、医者に診てもらったら、転地療法するといいってぇんだ」

「うん」

「なるべく海辺の空気を吸うといいというんだがな、どこへ行くったって金がなくちゃしょうがねえや。そこで気がついたのが品川だ。ここなら海辺だから、空気もいいし・・・そこで、おれは当分ここの家へ居残りになって、ゆっくり養生して、体がなおった時分にまた逢おうよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【性の遊びへの後ろめたさ・・・「転地療法」という方便】 4

←

落語「山崎屋」の中の描写

「遊女三千人御免の場所」といいまして、吉原には三千人の遊女を許可しておりました。この花魁の数に加えて、それに付随した人間がおりましょうから、一万人は越していたでしょう。それらの生活費をみなお客さまが運ぶのですから、なかなかたいへんなもので・・・」

「治療」と「癒し」

medical treatment と healing

近代医学による治療・・・客観的な病因への攻撃

伝統医学による癒し・・・主体としての病人の元気づけ

＝抵抗力を高める試み

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

Cf.「まれ人＝来訪神」を迎える儀礼の四要素（折口信夫）

① ご馳走、② 酒、

③ 芸能、④ 性的サービス

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

現代の病院・・・健常者なら3日の入院で病気になる

高度経済成長を支えた盛り場・・・リースマンと桑原武夫 6

←

美人の花魁・高尾と結ばれる紺屋の物語

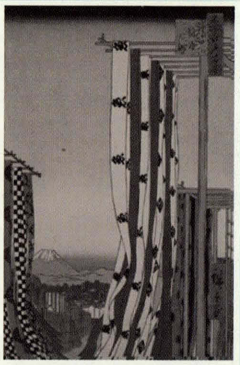
落語「紺屋高尾」

松ノ位といわれた（美人の）花魁が手ずからそめてくれるというわけで・・・さあ、高尾に染めてもらったものを身につけていれば、悪い病気にかからない、風邪なぞは予防注射より、この方が効いたというくらい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「藍染め」の殺菌効果？

美女の「プラシーボ効果」？



広重「神田紺屋町の図」

江戸の社会と「性事」

好色なる動物＝ヒトのジレンマ → 衣装の発明

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

永続的発情← → 配偶者間の貞節

性の文化の成立＝「性事」（本多勝一）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

江戸という都市

① 人口稠密都市

② 保障される「食」

③ 人口の65%が男性

④ 性的貞潔の倫理と道徳

遊郭という時空間の不可欠性

8

←

性と人間・・・D.モリスの仮説から

ジャングルからサバンナへ

狩猟のための瞬発力の克服のために

① 保温効果の高い毛の減少

② 体温の発散を促す汗腺の増加

③ 保温効果を補償する皮下脂肪の増加

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

子供の育児期間の延長 → 性別分業 → 性的結合の強化 → 発情期の消滅 → 好色な動物＝ヒトの誕生 → 尻の造形を模擬する胸、女性性器の造形を模擬する唇

7

花魁道中の絢爛豪華

「吉原には花魁の道中というものがありまして・・・まことにあでやかなものでございます。髪を縦兵庫、あるいは横兵庫という髷に結いまして、これへ後光のようにかんざしを挿し、金糸銀糸で縫いをとった裲襠（しかけ）をはおって、三歯の高いぽっくりを履き、内外八文字を踏んで中之町を道中をする。両側のお茶屋では三味線を弾きます。この音楽につれて、しゃなり、しゃなりと歩いてくる」（落語「山崎屋」）。

10

←

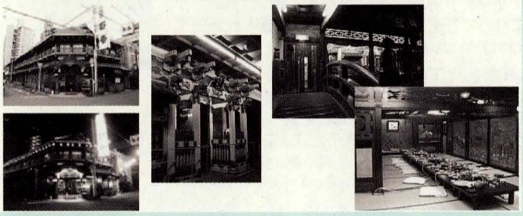
日常生活世界から隔離する「しつらい」

卓抜の「遊興空間」＝遊郭

「吉原には色々の規則がございまして、第一が大門口から中へ、駕籠乗物は一切入れないことになっておりました。・・・それは、廓抜けなどありまして、その時に駕籠があれば、その中へ隠れて廓を抜け出す遊女がある、そういうのを警戒（してのことでした）」（落語「山崎屋」）

悦楽のマルチメディア

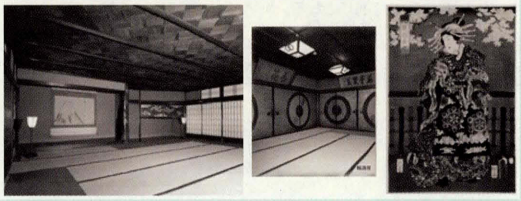
「もうお座敷なども実に結構なもの。床の間には遊芸の道具がずらっと並んでいる。・・・第一にあるのが琴、いい楽器でございますね。それから三味線、胡弓、月琴、借金なんぞも多少ありますけども・・・西洋の楽器ではオルガン、ピアノ、バイオリン、チャルメラ・・・そんなものはない。あんまりきれいなんでね、久蔵さん、ぼーっとしちまった」（「紺屋高尾」）。



←

「異界」のしつらい（cf.TDR）

夏の蚊帳でも太夫職は、紗、生（すずし）、しぢらなどの生地のものが用いられ、釣輪は七宝の華美なものが使用された。また閨房を飾る夜具にいたっては眼もまばゆい豪華な室礼であった。襴絹、ビロード、緞子の生地が用いられた。それは大名の寝所よりも豪奢をきわめた。そんな夜具にくるまって遊女と知引する嫖客は、まるで龍宮の浦島太郎のような天にものぼる喜びであったにちがいない（福田和彦『江戸の性愛学』）。



酒も御馳走も・・・金次第 ⇨ 遊郭＝悪所

「や、えらくうめえ酒だね、こりゃ。おらたちの飲むさけたァえれェ違えだ。へへへへ・・・安くなかんべえな、こりゃ。番頭さん、これ一合どのくれえ・・・え？　値を聞いちゃいけねえ？あは、見栄の場所だで値を聞いちゃいけねえ。そんじゃ、まぁ黙って頂戴すべえ」(「ミイラ取り」)

「そりゃね、表向きは見識を売る商売だから(紺屋職人には買えないって)言うが、しかし売りものに買いものだ、金を出せば買えるんだ。高貴のお姫様ではないんだから、金で買えんことはない」(「紺屋高尾」)

14

←

遊女への憧れ

遊女たちは、からだにシミもない黒子もない、じっとり濡れたような滑らかな肌、恥髪はホヤホヤした薄毛で、上つきの、恥丘は肉付きがよく、女陰もまた同様でふっくら盛りあが(っていた)。・・・麝香や龍涎香などの匂い袋を、膣の奥に入れて、香ぐわした。そして着物に香を薫らせ、染みこませた。湯沐みには菖蒲を用いた。閨に入り、裸身になれば、それこそ匂うがごとき香艶なる肉体であった(福田和彦『江戸の性愛学』)

角海老楼の花魁道中装束
(1914)

13

遊女・・・「加虐」と裏腹の「もてなし」

熊のような毛むくじゃらで口臭が強く、行儀の悪い関東の荒武者を迎えた遊女が、少しも厭わず、旨そうに口を吸わせ、気が行った振りをした。その男は帰る時、「なつかしそうにもあり、残り多そうに見せかけ」た(柳沢淇園、1794『ひとりね』)

「予のそばへまいって膝へ深くもたれ、『殿さん、浮気をするとききまへんよ』と申して、予の膝をきゅっと抓りよった」(「盃の殿様」)

「吉原というところは・・・すぐ帰るにしても、それまではお前の女房だから、なんでもいいやな、遠慮なく言いつけな」(「ミイラ取り」)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

妻といふものこそ、をのこの持つまじきものなれ。・・・いかなる女なりとも、明け暮れ添ひ見んには、いと心づきなく、憎かりなん。女のためにも半空(＝うわのそら)にこそならめ」(吉田兼好『徒然草』)

16

←

悪所・・・その「倒錯のもてなし」

幕藩体制のタテマエ・・・身分秩序、倹約、性的禁欲
庶民の「ホンネ」・・ 地獄の沙汰も金次第、贅沢・性的放縦への憧れ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「(花魁)は相手がお大名だからなんてんで決しておどろくようなことはない。・・・(吉原では)お客さまよりまず、花魁を大切にするという。上座へ布団を持ってきて、蒔絵の煙草盆を前へ置く。対の禿といいまして、十一、二になる少女が二人、これについておりまして、それから振袖新造、留袖新造という花魁の候補生、これが三人。遣手さんが三人、若い衆が五人、機動隊が一個中隊、そんなものはつかないけれど、ぴたりと花魁が布団の上に座る。ぽーんと正面を切ったら、脇目もふりません」(「盃の殿様」)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ホスト・ゲスト関係」の転倒(cf. 酒場のカウンターの内と外)

15

「もう一つの人生」という妄想 ⇨ 現実世界の軋轢・葛藤、鬱屈・倦怠のカタルシス

「不定愁訴」の殿様の「病気療養」

「予は病気である」なんてんで、いやなものはみんな病気だってんで逃げてしまう。・・・(そして)「予は今宵、吉原町へ傾城を求めにまいる。・・・病気治療にまいるのじゃ」・・・(やがて花魁と目合わせした)殿さまは鼻の穴を広げて、目をすえて、だんだん息は荒くなってくる。血圧は180ぐらいになって、もう呼吸困難におちいるというさわぎで、息をつめて花魁の顔を見ている。・・・(こうして)ひと晩遊んでお帰りになる。さ、生まれて初めてこういう愉快をしたんですから、もう八分通り病気なんてなおっちまった。人間ですから誰だって変わりはない・・・」(「盃の殿様」)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「虚実ないまぜの病気」

⇩

「虚実ないまぜの性的遊戯」

←

「別世界」の「遊郭」 ⇨ 「疑似夫婦」関係「たまさかの安堵」

「ふふふ。で、その花魁とあなたと、もし、ご夫婦になれたらどうします？」「うーん、なれたらいいやね」「いえ、ただ『いい』じゃ困りますが、もしご夫婦になったら、あなたのお道楽がやむんですか」「そりゃアお前、当り前だね。惚れた同士が夫婦になって、道楽をしてくださいと頼まれたってできるわけがないだろ」(「山崎屋」)

「年季があけておめえと夫婦になるってェから稼いでいるんだ。おめえが死ぬてェなら、俺ァ死んじまう」・・・「あたしも実のことを言うと、お前さんだけはおいてきくたくないんだよ。あとでどんなおかみさんをもつのかと思えば、あたしだって気がかりじゃないか？」(「品川心中」)

17